



明治学院大学機関リポジトリ  
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	中国の近代作家と植民地の体験 矛盾に耐える生
Author(s)	川俣, 優
Citation	明治学院大学教養教育センター紀要 : カルチュラル = The MGU journal of liberal arts studies : Karuchuru, 3(1): 43-52
Issue Date	2009-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/3196">http://hdl.handle.net/10723/3196</a>
Rights	

# 中国の近代作家と植民地の体験

— 矛盾に耐える生 —

川 俣 優

## はじめに — 植民地に生きる矛盾 —

中国においては、長くイギリスの植民地であった香港が返還されて10年が経過した。ヨーロッパ列強による植民地支配が世界的に盛んであった19世紀から20世紀にかけて、中国では日本がその主権を侵す時期が続いた。19世紀末から半世紀に及ぶ日本の台湾支配と1930年代から10年余り続いた東北中国、旧満洲の支配、さらに第2次世界大戦期には中国各地の大都市の占領へと発展していった。そうした植民地、半植民地となる体験を経た地域では、中国の近代文学も独自の発展の歴史を歩んだ。そこで生まれ育った作家たちは、不安定な自らの生の根拠を文学に求める試みを続けた。侵入した異民族に支配される屈辱を胸に秘めて膝を屈し、憎悪する支配者に服従する矛盾した心理を、鋭い感性に満ちた若き中国人作家たちはどのように表現したのだろうか？ 二重のアイデンティティを強制され、内面に敵対する文化を受け入れて生きる植民地の人々の思いはどのようなものであるのだろうか？ 彼らの文学が投げかける問題はきわめて重要である。

21世紀を迎えた現代世界では、多様な文化を形成する様々な民族・社会が様々なレベルでの接触を繰り返し、相互に影響を与え合い、これまでにないような文化の混淆が進んでいる。そうした

新たな体験は現代世界に生きる私たちに、新たな豊かさと新たな不安を同時にもたらしている。こうした現代における異文化接触という体験を先駆的に与えられ、それがもたらすものを表現しようとした中国作家の試みは、私たちに大きな示唆を与えてくれるはずだ。彼らは己の非とするものを抱え込んで生きたが、それは人間の生の本質に他ならないとも言えよう。己の意に反する他者や死を受け入れて、共に存在しようとするのが人間の生の条件であるはずだ。本稿では、1930年代から40年代にかけてハルビン、上海、香港などで日本の侵略と占領を体験した蕭軍、爵青、穆時英、張愛玲という中国作家たちの文学に検討を加えて、その現代的な意義を探ってみる。穆時英と蕭軍の全集は2008年になって初めて刊行され、その重要性が改めて評価されることとなった<sup>(1)</sup>。

## 1. 寄宿舍の少女たち — 蕭軍とハルビン —

蕭軍は1907年に現在の遼寧省に生まれ、初め軍人を志したが、腐敗した軍隊組織になじめず、日本軍に抵抗するゲリラ活動に加わり、やがてそこから身を引いた。1931年にハルビンに行つて文学の道を目指し、翌年の夏に蕭紅と出会い、共に暮らすようになる。二人は進歩的な活動を進める文学・芸術のサークルに関わったが、満洲国警察の弾圧を受ける危険を察して、1934年にハ

ルピンから大連、青島を経て上海へ渡る。蕭軍がハルピンで暮したのは3年足らずであったが、その間に蕭紅と最初の共同作品集『跋涉』を刊行した<sup>(2)</sup>。抵抗精神の旺盛な蕭軍の文学の性格を、陳亜麗は次のように指摘する。

中国現代文学史においてかつて一定の影響を生み出した作家として、蕭軍を他の同時代の作家や同時に名をなした東北作家群の作家たちと比べてみると、その最もきわだった特色は彼の一貫した“主観的戦闘精神”にはかならない。そういう文芸思想の生まれた根源は当然のことだが、彼の人生の遍歴や身を置いた時代と必然的な関係がある。彼の回想録を読みなおしてみると、読者は彼が一生絶えざる“抗争”の中で過したことを発見するはずだ<sup>(3)</sup>。

蕭軍の抵抗精神は後に1940年代の根拠地延安で、また1950年代の中華人民共和国においても発揮され、中国共産党指導部の厳しい批判を受け、追放される所まで発展していく。蕭軍はきわめて個性ある生き方を貫いた作家である。

蕭軍の初期の作品には、ハルピンで共に暮した蕭紅の姿が登場することがある。青春期に父親に逆らって家出し、ハルピンや北京で流浪の生活を送っていた蕭紅の姿に、蕭軍は東北人全体の孤立した運命も重ね合わせていたようである。ハルピンにおける蕭紅の姿が描かれた作品としては短篇「燭心」と「一隻小羊」、中篇「涓涓」、長篇「為了愛的緣故」などがある<sup>(4)</sup>。その中でも注目すべき作品は「涓涓」である。この「涓涓」がハルピンで書かれたのは1933年春から数ヶ月の期間であることを、蕭軍が単行本の“前言”で語っている<sup>(5)</sup>。満洲国の成立後、1年を経た時期である。この作品には、女子中学時代の蕭紅をモデルとす

る少女が登場する。蕭紅は1927年から30年にかけて、ハルピンの第1女子中学（中高一貫）で学んだ。ハルピンの家を離れ、寄宿舎に入って3年間を過したその女子中学時代の光景は、蕭紅の短篇「手」にも描かれている<sup>(6)</sup>。その蕭紅の女子中学における体験を題材として、蕭軍が書いた学園小説が「涓涓」である。蕭紅の思い出を、蕭軍が聞き取って原稿にまとめ、ハルピンの新聞に連載していった作品である。連載は途中で打ち切れ、後に単行本として刊行された。第1部で中断された未完の作品であり、全篇がどのように発展していく構想であったのかはわからない。蕭軍の新たな全集に収録されて、多くの読者の目にふれることが可能になった。

この「涓涓」に描かれるのは、1920年代のハルピンで学園生活を送る思春期の少女たちの悩み多き姿である。登場する女子生徒たちの中で、とくに焦点が当てられているのは仲の良い同級生の瑩妮と涓涓の二人である。作中の瑩妮の設定は9歳で実母を亡くしている点など、蕭紅の実際の生い立ちと重なりあっている。時代が変わり、中国の少女たちも中学・高校に進学することができるようになったが、彼女たちの未来を切り開いてくれるはずの学園生活は決して明るいものではなかった。休暇が終わった瑩妮が戻っていくハルピンの街は、希望のない暗いイメージで描き出される。

都会は貪婪な巨獣のように、倦むことなく永遠に、口の中に投げ込まれる人と物を呑み込み、黒い毒ガスと食べられた人々の白骨を排泄し続ける。

また、そのおぞましい街の学校の寄宿舎で暮す瑩妮は、強い孤独感にもとらわれている。

— 人々はいつもこんなによそよそしく、隔たっているのだろうか？ これが人生なのか？  
— そうだ、人と人のあいだはよそよそしく、遠く、隔たっていて……親しみというものなどないのだ。ましてや、私には水源もないし、支流もない。注ぎこむ海もない小さな流れだ。ほどなく、私自身が涸れ果ててしまうことだろう。……

自由を求めて羽ばたこうとする彼女たちを押さえつけるのは、学校の女性校長や教員たち、舎監である。自由を求めながらそれを得られない少女たちの憂いと憤りが、この作品には描き出される。憤る瑩妮と涓涓は、寄宿舎にこっそり持ち込んだお酒とタバコで憂さを晴らす。少女たちにとっては、学園の中も外も暗い囚われの場として描かれる。かすかな憂さを晴らす場所は寄宿舎の片隅だけである。寄宿舎という仮の住まいしか持たない少女たちの姿には、本当の居場所を持ってないやりきれなさが溢れている。この自分のいる場所がよそよそしく感じられるという思いは、植民地の下で暮らす人々の当然の感覚でもあろう。蕭軍がこの少女たちの孤立感を通して伝えようとしたことは、植民地となった東北中国の人々の鬱屈した憤りでもある。

「涓涓」は蕭軍と蕭紅の合作とも言える作品であった。こうした少女たちの学園生活を題材として選んだ点には、満洲国における弾圧への警戒心があったかもしれない。この中篇作品の掲載は中断されたが、その終りの部分には、暴力を振って下級生をいじめる運動部の女子生徒の粗暴な姿が描かれる。校長や教員の封建的な姿とともに、同じ女子生徒の粗暴な姿が描かれ、それに憤って立ち向かう瑩妮の姿も描かれる。この暴力に対する批判、抵抗の精神は作者蕭軍が一貫して貫いた

ものであり、この「涓涓」という作品は蕭軍のそうした強い抵抗精神と、蕭紅の強い孤立感が絡み合って成り立っているものと言えよう。自由を求める蕭軍と蕭紅は1934年6月に植民地の下のハルピンを脱出し、青島を経て上海に向かった。二人は他の作家とともに、その上海の文壇で“東北作家群”と呼ばれて新たな活躍を始めることになる<sup>(7)</sup>。一見、蕭軍に似つかわしくない女子生徒たちの学園小説にも、植民地人の抵抗意識が隠されている点に注目しておきたい。蕭軍はこうして満洲国を脱出したが、一方満洲国の下に留まって自らのアイデンティティーについて考えた青年作家たちもいた。その一人である爵青のハルピンを舞台にした作品を比較し、検討してみる必要があるだろう。

## 2. 青年たちの挫折 — 爵青とハルピン —

満洲国の下のハルピンで生活した体験を持つ作家として爵青がいる。爵青は1917年に長春で生まれ、1962年に亡くなった<sup>(8)</sup>。抗日戦争中、植民地満洲国に留まって文学活動を続け、高く評価された作家である。そのために、中華人民共和国成立後は日本側への協力者として糾弾され、文学活動を行うことはできなかった。また、著作の再刊も長くなされなかったが、近年その作品集が中国近代文学のアンソロジーの1巻として刊行された<sup>(9)</sup>。また、上海華東師範大学の研究者である劉曉麗氏が爵青を再評価する論考を発表し、新たな考察を加えている<sup>(10)</sup>。爵青はポーヤリラダン、ジッドなどの欧米文学の影響、またフォスターの小説理論の影響を受け、若くして才能を發揮し、満洲国の文壇では鬼才とも称された。ジッドの「新しき糧」を座右の書としていたともいう。爵青は満洲国に留まって、ロシア・ヨーロッパや日

本文化との接触を体験する。そうした異質な民族・文化に触れることによって、爵青は古い中国文化の伝統をとらえ直そうとした。古い時代の中国が生まれ変わろうとして苦闘した20世紀前半の歴史の中で、爵青は早熟な作家としての才能を発揮したが、やがて失墜していく。爵青は植民地で古い中国からの脱出を目指しながら、新たな未来もとらえきれずに煩悶した。未来を見出しえぬ鬱屈した挫折感が、爵青の文学のテーマとして表現される。彼の作品の中から、ロシア人の作った町ハルピンと古き中国の村を背景とする対照的な作品をとりあげて、比較してみよう。

爵青は短篇の「ハルピン」と「恋獄」で、ハルピンを舞台にした中国人の青年男女の姿を描いた<sup>(11)</sup>。この二つの作品はいずれも、その書き出しが主人公のハルピン到着から始まる点で共通している。「ハルピン」の主人公は青年、「恋獄」の主人公は娘と、男女の違いはあるが、中国人の若者が新たに職をハルピンに求めて南方からやってくるという設定では共通している。ハルピンは彼らにとって、新たな未来を切り開く豊かな可能性を秘めた都会と思われた<sup>(12)</sup>。作品「ハルピン」では、主人公の青年が家庭教師に雇われ、新たな生活のスタートを切った姿が描かれる。しかし、青年はまもなくその家の主人の第3夫人に誘惑されて、身を持ち崩す。作品は、その青年が第3夫人と関係をもったことが主人に知られて、呼び出されるところで終わる。主人の屋敷へ戻る最後の場面はこう描かれる。

穆麦は薄い灰色のトーンの油絵の中を進んでいくかのように、車体に揺られていた。工場では近頃、労働争議がよく起こる。この間は半日ストライキの騒ぎが起こった。幸い、翌日には原状が回復したのだが、主に今日呼び出されたの

は何ごとだろう？ 車上から郊外のみすばらしく汚いスラムや土木労働者たちのテント小屋を眺めながら、街路樹の並ぶアスファルトの道を走り、角を曲がって工場の門の前で停まった。彼は思った。また、頭の痛いことが始まりそうだ。

この描写には主人公のハルピンにおける明るい夢が破れかかり、かげりを見せた不安な状況が巧みにとらえられている。ハルピンは若者たちに夢をもたらす街であると同時に、破滅をもたらす危険な街でもある。前途ある若者を誘惑し、墮落させる世界であり、貧しい者の犠牲の上に作られた虚栄の市でもある。ロシア人が1900年前後に建設を始め、あっという間に成長を始めた近代都市ハルピンは、見せかけのまばゆさと不安定な危うさを同時に孕んだ二重性の上に成り立っている。そのハルピンの街の姿は、植民地満洲国の実体を象徴するものと言えるだろう。飾り立てたことばで讃えられても、満洲国の本質は中国人の若者に破滅をもたらすものであることを、爵青はこの作品で巧みに表現している。なお、この作品の初稿と現在読めるテキストには違いがあるようだが、未確認である。改めて検討すべき課題としておきたい。

一方、爵青のような1930年代の青年たちにとって、中国の古い社会や家族制度がどのようなものととらえられていたのか。その問題に関する爵青の思いを、2篇の短篇「蕩児」と「帰郷」から探ってみよう<sup>(13)</sup>。「蕩児」という作品は劇的な物語の展開はなく、9年前に家を離れた主人公の青年が志破れて故郷の家に戻り、徐々に家族と再会する姿を断片的に綴った短篇である。青年は両親と再会し、古い家を大事に守って生きていくべきだと諭される。昔の恋人も青年の帰りを9年間、じっ

と故郷で待ちわびていた。古き中国から抜け出すことを考えられぬ彼らの姿を見て、新しい生活を夢見た青年は煩悶する。しかし、未来への夢を抱いている弟の姿にふれて、青年は再生への希望を取り戻す。聖書の逸話を利用して、新旧の時代のはざままで悩む青年の煩悶を表現した作品である。「蕩児」の末尾には、“蕩児は脱出したのではなく、歩み入ったのだ。彼は生命と青春と幸福と情熱にあふれた世界に歩いて行く”という作者の言葉が記されている<sup>(14)</sup>。古き中国を捨て新しい未来をつかもうとする思いが、この作品には表されている。その思いは別の短篇「帰郷」にも表現される。「帰郷」は主人公の青年がやはり親の故郷の村を訪ね、家産をめぐる一族の者どうしの争いに触れる体験を短く描いた作品である。中国の古き家族制度が崩れかかった時代の中で、新しきものを模索する青年の戸惑いがとらえられた作品である。この「帰郷」は日中戦争中に武田泰淳の手によって翻訳され、日本の読者にも紹介されている。日本人の若き武田泰淳も未来を探る同じ思いで、この作品を翻訳したのだろう。武田の翻訳の末尾の改編が爵青の新たなものを目指す可能性を閉じているという点については、橋本雄一氏の指摘がある<sup>(15)</sup>。

爵青は満洲国に留まって、このような古き封建的な中国から抜け出ることを課題としながらも、同時にハルピンのような都会においても新しき自由が実現されていない矛盾に向かいあっている。夢の実現に挫折し戸惑いながらも、その矛盾を受けとめ自分の生活を続けていくことが、爵青の文学では課題とされている。植民地の不安定な状況の下で矛盾を抱えながら新たな生命の蘇りを求めることが、爵青の文学のテーマであった。爵青が文学の世界に求めたものを、劉曉麗は次のように指摘する。

生きていく理由は自分の精神を創作の中に沈潜させ、そこで生命が救われる可能性と精神の自由の喜びを探し当てることだ。彼は作品において、生命の問題を探り、語りのスタイルの問題を探った<sup>(16)</sup>。

この指摘にあるように、第2次世界大戦期に自らの生命のあり方を探り、それをどのように表現するかに心をくだいた爵青の文学は改めて評価し直すべきものであろう。さらに、劉曉麗が指摘していることだが、爵青の文学を検討するためには、同様の課題をもって活動した、同時代の中国の他の地域の作家たちの試みとも比較する必要がある。次に、戦時下の上海や香港で日本軍による占領を体験し、作品の発表を行った穆時英と張愛玲の文学について検討してみたい。第2次世界大戦期に中国の都会を背景として作品を書いた、この2人の作家の試みについて順にふりかえてみる。

### 3. 地獄の上の天国 — 穆時英と上海 —

蕭軍や爵青は1930年代に中国東北部（旧満洲）で作品の発表を始めた。その後、蕭軍は上海へ亡命して抗日運動に加わり、爵青は満洲国に留まって作家活動を続けた。一方、南方の上海や香港で生活し、日本軍の侵略・占領を受ける中で文学活動に関わっていった作家として穆時英や張愛玲がいる。先に文壇に登場した穆時英の文学について、まず検討してみたい。穆時英は1912年に生まれ、若くして1930年代の上海文壇に登場し、文芸誌『現代』に集まったモダニズムのグループの代表的な作家として活躍した。嚴家炎はこう指摘している。

穆時英はまばゆいばかりの文学の才能を持ち、上海の生活にきわめて通じていたために、新しい感覚が濃厚にあふれた、言語表現もなかなか円熟したモダンな都市小説を生み出した<sup>(17)</sup>。

穆時英が作家としてスタートを切ったのは1930年前後であり、1932年初頭には日本軍が上海を攻撃し、一時期占領する上海事変が起こっている。実質的に日本が上海という中国の中枢を占領しようとする時代の中で青春を迎え、文学の道に進んだ。穆時英はさらに日中戦争が進展すると、中国国民党の内部抗争の中で日本側に寝返った汪兆銘派に近づき、1940年に暗殺されて短い生涯を終えた。近年、中国現代文学史における“新感覚派”として、そのきらびやかでシニカルな表現に再検討が加えられ、新たに全集も刊行された。穆時英が1932年から33年にかけて発表した未完の長篇「中国一九三一」の中に、「上海のフォックストロット」（原題「上海狐步舞」）と題された1章がある。その1章は“上海、地獄の上に造られた天国”という言葉で始まり、同じリフレインで終わる。1931年の上海を地獄と天国を重ね合わせた矛盾する二重性でとらえる構造的な認識、また地獄と天国という言葉のリフレインで作品を括る音楽的な感覚の表現には、穆時英の文学の特色がよく現われている<sup>(18)</sup>。

穆時英の文学を考えるために、1930年代の文学者の姿を戯画化して描いた短篇「Pierrot」（1934年）をとりあげてみよう<sup>(19)</sup>。この作品は題名の示す通り、近代中国における文学者の姿を哀しく滑稽な道化師、ピエロとして描いたカリカチュアである。作品の舞台は上海、主人公は文学者潘鶴齡先生と設定されている。作品のタイトルには“寄呈望舒”という献辞が付され、主人公のモデルは親しい詩人の戴望舒とも穆時英自身とも言わ

れる。しかし、主人公の姿はあるモデルを写實的に描いたものと受けとめるよりも、近代上海の通俗的な文化人のイメージを滑稽に誇張して戯画化し、また自嘲的に表現したものとみなすべきではないだろうか。穆時英の文学は、20世紀初めの定型化されて活力を失った近代文学の既成の表現をシニカルに批判し、新たな感覚で自分の生きる時代をとらえて表現しようとした試みであった。しかし、穆時英は戦時下の政治的抗争の中でも積極的に行動して、対立した勢力からの反発を受けて暗殺され、若くして命を落とした。穆時英の真意や行動の実態は、今なお闇に閉ざされたものとなっている。穆時英の文学は上海が日本軍に占領される非常時にスタートし、本格的な日中戦争のさなかに幕を下ろした。そうした混迷の時代に生み出された、新たな感覚の文学であった。

「Pierrot」は主人公の文学者潘鶴齡先生が心を捧げる愛人と民衆運動に裏切られ、その幻想を打ち砕かれる姿を滑稽に描いた作品である。物語の中で中心的に語られるのは、日本人の恋人である瑠璃子に寄せる潘鶴齡の思い込みが裏切られる経緯である。潘鶴齡は常々、作家である自分の本当の気持ちを理解してくれる読者などいないという思いにとらわれている。

私はこの世界に生存し、この社会に生存している。私の作品は大勢の人に読まれ、大勢の人に賛美され、大勢の人が涙を流す。ところが、彼らが涙を流すのは、私が泣かせようとした思想や場面、センテンスのためではなく、自分では彼らが泣くかどうかわからないような場面なのだ。私のそばには大勢の人が、数え切れないほどの人がいる。私は彼らと話し、彼らといっしょに笑い、彼らといっしょにため息をつく。ところが、彼らは私の言っていることをわかっ

てはない。私も彼らの言っていることがわからない。

そして、潘鶴齡は自分を理解してくれるのは、純真で貞淑な日本人の愛人瑠璃子だけだと信じている。ところが、その瑠璃子がフィリピン人の恋人を持つあばずれ女であることを知り、愕然とする。また、一方で密かに民衆運動に関わり、民衆の英雄となることを夢見ていた潘鶴齡はやがて逮捕される羽目になる。潘鶴齡は逮捕や釈放の際には民衆の悲憤と歓呼の叫びに包まれることを夢見ていたが、現実の場面では誰にも見向きをされず、やはり愕然とする。1930年前後の国際都市上海の世情を背景に、スノッブの文化人が熱を上げた恋愛や民衆運動の幻想に裏切られる姿を自嘲するかのように描いた作品である。

穆時英が文学のスタートを切った時期は、中国の南方から革命の気運が高まり、外部からは日本の侵略が進み、時代が大きく変わろうとする頃だった。穆時英は周囲の世界が激変する環境の中で成長し、それを表現する作家となっていく。上海は古い中国の街から国際都市へと発展した。古く貧しいものと新しく豊かなものを二重に抱え込む上海の街を、穆時英は「地獄の上に造られた天国」と呼んだ。その国際都市上海の激変する世情について行けず、浮き上がってしまう存在を、穆時英はピエロ、道化師という言葉で示した。外面的な姿と内面がくいちがう矛盾を抱え込んだ存在の象徴として、ピエロという言葉を一作品の題名に選んだ。穆時英はこの作品を収めた『公墓』の序文で、ピエロについて“彼らは悲哀の素顔に快樂の仮面をつけられる”と語っている<sup>(20)</sup>。また、鈴木将久氏は穆時英のピエロ像を指して“弱者とすら言えないような、固有の場所を持たない人”と呼んでいる<sup>(21)</sup>。こうした、自らのアイデンティ

ティーが稀薄で分裂した存在は、近代の時期にはマイナスのものとして考えられただろうが、現代の大衆化の進んだ社会ではより広く存在する。そうした人間の流動的で稀薄な自我のあり方をとらえた穆時英の表現は、現代世界の人間にとってはより実感のあるものと言える。インターネット社会における架空のアイデンティティーが新たな関係を作り出す現代において、穆時英の新感覚はよりリアルに受けとめられるだろう。外国軍の占領統治下の矛盾した複雑な思いを、積極的に新たな表現を生み出す文学に反映させた穆時英の試みは注目すべきものである。しかし、穆時英は日中戦争下の政治的な抗争にまで関わり、わずか27歳で暗殺され、その文学活動は中断されてしまった。穆時英の文学は改めて検討し直すべきものと思える。

#### 4. 敵を愛したスパイ — 張愛玲と上海 —

穆時英と同様に上海や香港で日本軍による占領支配の生活を体験し、文学活動を進めた女性作家として張愛玲がいる。張愛玲は1920年に上海の名門の家庭に生まれた。2007年には各国の合作で、彼女の短篇小説「色・戒」が「ラスト、コーション」と題されて映画化された<sup>(22)</sup>。張愛玲の文学のテーマが、現代世界においても重要な意味をはらんでいることのひとつの証であろう。「色・戒」は抗日戦争中の上海を舞台に繰り広げられる、中国国民党内部の抗争を題材にした作品である<sup>(23)</sup>。やはり、日本軍が占領する上海で抵抗活動に関わった若い中国人女性の苛酷な運命が描かれている。張愛玲の占領下の体験が作品にどのように反映しているのかという視点から、その意義を考えてみたい。

「色・戒」で語られるのは、1940年代の上海で



抗日運動を進めるグループが日本と手を結ぶ汪兆銘派の要人の命を狙って失敗し、逆に命を落とすという物語である。作品の主人公は抗日運動に関わる女性スパイの佳芝と、彼女たちのグループが命を狙う国民党汪兆銘派のスパイ組織の責任者である易の二人である。日本軍の制圧下にある上海では中国人の抵抗運動が密かに進められる。その一方、中国を裏切って日本に従う汪兆銘派の勢力が台頭する。その対立する勢力が相手を攻撃するために、スパイ活動にもしのぎを削る。この作品の背景を成すのは1940年代中国の抗日戦争における諜報組織の戦いであるが、焦点が当てられるのはそこに浮かび上がってくる男女の複雑な心理の絡み合いである。女性スパイの佳芝は命を狙う易に近づいて誘惑し、襲うチャンスを探る。しかし、易と逢瀬を重ねるうちに心惹かれる思いを抱くようになる。襲撃の日、佳芝は易を宝石店におびき出すが、最後の場面で彼に逃げるよう合図する。咄嗟にすべてを察した易は逃げ出し、間一髪で危機を脱する。佳芝もその場を離れていく。自宅に戻った易は諜報機関の責任者として、自分の命を狙った佳芝のグループの摘発を指示し、その日の内に捕えて処刑することを命じる。そして、短い作品は終わる。

この作品では、主人公の男女2人がじつは敵対するスパイどうしであり、表向きの顔と内面の姿がまったく違う人物として設定されている。人間の存在が孕む複雑な矛盾した様相を、戦時下の敵対する者どうしの姿を通してとらえようとした作品である。女性スパイの佳芝は敵である易に接するうちに、ある愛おしさを抱くようになってしまう。しかし、易の方は命をかけて自分を救ってくれた佳芝を、無情にも処刑する指示を出す。易の思いを、作者は次のように表現している。

計画は実に綿密、周到だった。ただ、美人が急遽、計画を変え、この俺を逃がしてくれた。彼女はやはり俺を心底、愛していたんだ。彼女は俺の人生でいちばん心を分かち合えた女性だった。

彼女は死ぬ前にきっと俺を恨んだに違いない。だが「毒なき者、男にあらず」だ。このような男でなければ、彼女だって愛してくれなかったはずだ<sup>(24)</sup>。

小説における表現であり、極端な形で強調されているが、人間の心の不可思議な本質をよくとらえている。愛と憎しみのような相反する感情がもつれ合う人間の心の矛盾や、理性と感情が相克する人間の心の不可思議が極限的な状況の中で鮮明に浮かび上がる。人間のアイデンティティーをなす理性、感情、身体はあるシチュエーションの中でそれぞれくいちがった反応を示しながらゆらぎ、調整されて一つの行動が選ばれていく。こうした人間の存在の流動的で矛盾を孕んだ姿が、この作品によって描かれている。自我を固定的に実体的にとらえる近代的な解釈とは違った認識が示されるところに、この作品の意義を見出せるのではないだろうか。張愛玲は実生活においても汪兆銘グループの要人である胡蘭成一時期、結婚生活を送った。その体験が作品「色・戒」にも反映されているようだ。作家としての活動期間は短いものではあったが、人間の不可思議な心と身体のある方をきめ細やかにとらえた張愛玲の文学は、今なお十分に評価すべきものである。

#### おわりに — 矛盾に耐える試み —

中国では1930年代に日本の侵略を受けて、東

北部(旧満洲)が植民地と化し、その後も北京、上海、香港などの大都市が日本軍に制圧されて、占領下に置かれる状況を体験した。そこで、青春期を過し、文学の道に入っていった北方の蕭軍や爵青と、南方の穆時英や張愛玲の文学は、その体験を反映して、共通した傾向を示す作品を生み出している。それは、作中の人物たちが示すアイデンティティーのゆらぎである。植民地で支配を受ける人々は理不尽に己のアイデンティティーを否定され、屈辱感と挫折感を抱く。受け入れたくない現実に憤り、戸惑いながら、その矛盾に耐えようとする。外部からの耐え難いものの侵入に耐えながら、彼らは己と世界のあり方をとらえ直そうと試みる。外部からの異質なものを受けとめ、新たに己と世界を組み立て直そうとする。1930年代から40年代にかけて植民地支配を受け、その体験を作品世界に反映させた中国作家たちの試みはきわめて重要なものであった。己の非とするものを受けとめ、新たな状況を組み立てていかねばならないという課題を極限的な状況で突きつけられ、それに応えようとする試みであった。世界の構造が大きく変化する中で生きる私たちにとって、人間の本来的なあり方を考えるために、大きな示唆を投げかける文学として受けとめていきたい。

#### 註

- (1) 『穆時英全集』全3巻(北京十月文芸出版社、2008年1月)及び『蕭軍全集』全14巻(華夏出版社、2008年6月)。
- (2) 三郎・悄吟『跋涉』(五日画報印刷社、1933年10月)、蕭軍の生年は梁山丁・主編『蕭軍紀念集』(春風文芸出版社、1990年10月)の王德芬「蕭軍簡歴年表」による。
- (3) 陳垂麗「論蕭軍散文中的文芸思想和文化人格」(『中国現代文学研究叢刊』2007年第6期、作家出版社)。
- (4) 蕭軍「燭心」(1932年12月25日作、『跋涉』所収)。蕭軍「一隻小羊」(1935年2月25日作、『太白』第2巻第3期、1935年4月)。蕭軍「涓涓」(『國際協報』副刊「國際公園」連載、1933~34年)、単行本は上海燎原書店より1937年9月刊行。蕭軍「為了愛的緣故」(1936年9月30日作、『文季月刊』所収)。
- (5) 『蕭軍全集』第6巻(華夏出版社)所収、執筆は1937年6月21日。
- (6) 蕭紅「手」(『作家』創刊号、1936年4月)。
- (7) 『東北作家近作集』(『光明』1巻7号附録、1936年9月)の刊行などで定着した。
- (8) 「爵青小伝」(中国現代文学館『爵青代表作』所収、華夏出版社、1998年8月)参照。
- (9) 中国現代文学館『爵青代表作』(華夏出版社、1998年8月)。
- (10) 劉曉麗「偽満洲国作家爵青資料考索」(中国人民大学書報資料中心『中国現代、当代文学研究』2007年9期所載、原載『上海師範大學學報』2007年3期)。
- (11) 爵青「哈爾濱」(『新青年』1936年2月)、同「恋獄」(芸文書房『帰郷』所収、1943年11月)所収。ここでは改稿されたと思われる『爵青代表作』のテキストに従った。
- (12) 「恋獄」については拙稿「ハルビンにおける植民地の体験 — 1930年代の文学から —」(明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第2巻第1号、2008年3月)参照。
- (13) 爵青「蕩児」(芸文書房『歐陽家の人們』所収、1941年12月)、同「帰郷」(芸文書房『帰郷』所収、1943年11月)。
- (14) 爵青「蕩児」の末尾に付された“蕩児帰来的日子」後記」より。
- (15) 橋本雄一「テキストの原郷、テキストの異郷 — 爵青「帰郷」と武田泰淳訳 —」(内山書店『中国図書』2002年2月号)、武田泰淳訳「帰郷」(改造社『文芸』1944年4月号)。
- (16) 注(10)参照。
- (17) 嚴家炎「三点感想 — 在蕭軍百年誕辰紀念會上的發言」(『中国現代文学研究叢刊』2007年第6期、作家出版社)。
- (18) 穆時英「上海的狐步舞」(『現代』第2巻第1期、1932年11月)。
- (19) 穆時英「Pierrot」(『現代』第4巻第4~5期、1934年2~3月)。
- (20) 穆時英「公墓」(現代書局、1933年6月)。
- (21) 鈴木将久「裏切りの政治学 — 中国モダニスト穆時英の選択」(『権力 / 記憶 — モダニズム

中国の近代作家と植民地の体験

- の越境Ⅱ』2004年9月、人文書院)。
- (22) アン・リー監督『ラスト，コーション』(アメリカ・中国・台湾・香港合作，2007年)。
- (23) 張愛玲「色・戒」(1950年作，安徽文芸出版社『張愛玲文集』第1巻所収，1992年7月、『台湾時報・人間副刊』(1978年4月)所載)。
- (24) 南雲智訳「色・戒」(集英社『ラスト，コーション，色・戒』所収，2007年12月)。